

## 自分でみつけた 自分のこたえ

令和4年11月17日(木) 15:20~16:45

18日(金) 15:20~16:45

19日(土) 9:00~16:00

### 展覧会とは

南第一小学校の展覧会は、2年に1度開催される図画工作科(全学年)と家庭科(5・6年)の学習発表の場です。子供の学習発表の場であると同時に、大人と子供の鑑賞の場でもあります。一人一人の思いと工夫が詰まった作品が集まり、1年生から6年生までの表現を見合うことができ、自分や友達の良さに気付く機会になります。自分の思いを表す個人作品に加え、友達と話し合いながら協力する共同制作も行いました。子供たちが出合った材料や道具、テーマ、見たことや感じたことなどから、考え、判断し、方法を試行錯誤し、イメージを広げながら表現したものが集まっています。どうぞ、子供の視点に寄り添いながら、表現を通して何を学んだのか、何を伝えようとしたのかを考える場にしていだければと思います。

### 子供が自分でみつけた「こたえ」 ⇄ 自分の「ものの見方」 ⇄ 今のその子「そのもの」

現代は「正解がない時代」と言われることがあります。予測不可能な事象が次々に起こり、今まで当たり前感じていたことも、一瞬の間に常識ではなくなるかもしれない…今日、正しいと信じていたことが、明日の正解とは限らなくなっています。子供たちもそんな日々立ち向かっています。

そんな時代に必要な力は何だろう、と考えます。これまでの誰かの正解をなぞるだけではなく、状況に合わせて自分の視点で物事を考えていくこと、自分が正しいと信じたことを実行していくこと、どんな困難に出合ってもあきらめずにやり抜くこと…そんな力が求められるのではないかと考えます。芸術表現には、これまで、(おそらく)これからも「正解」がありません。社会や人とのかかわりの中で、自分が信じた自分の視点を根拠に、自分の考えや思いを伝えていく活動です。それが、社会や他の人にとって、新しい視点や価値を生み出していくことにもつながります。答えが無いものを信じて進むことは勇気が必要です。

今回の展覧会では、子供たちは自分なりの視点で、自分が信じた「良い」と思えるものを作品として表現し、展示しています。自分なりのものの見方をすることは、自分なりの答えを見付けていくことです。子供たちは表現をしながら、先の見えない世界を自分の視点で切り開いています。表現方法や見た目に違いが生じるのは、そのためです。表現の「差異」こそが、その子が「伝えたいこと」であり、伝えるために「選択した表現方法」であり、言葉では伝えきれない「良いと感じている感性」です。ありのまま受け止めて、表現されたものを通して、大人は子供たちと一緒にその意味を見付けられたらいいなと思います。そして作品を超えて、子供の素晴らしさを実感できる機会になればと思います。

作品を介しての子供とのコミュニケーション、作品から見える子供が見つけた答えをお楽しみください。裏面の〈鑑賞の視点〉を御参考に、作品から聞こえる子供の声に耳を傾けながら、御鑑賞ください。

## <鑑賞の視点> **子供の絵の見方**

「作品自体の評価」→「作品からの評価」へ  
こんな見方をしてみませんか？  
子供の作品 = 子供「そのもの」です。

～「子供の作品を見る」とは「作品から「子供の声」を聞くこと」

子供は作品を、条件や材料の中から選び出してそれを「組み立てていく」→「発見する」→繰り返し、その行為を重ねてつくっていくので、それを見る大人は、「近付いて、たどって、考えて」見ましょう。

### ① **近づく（子供の目線で見ると）**

遠くから見るだけでは、全体的な主題（何を表したか）に意識が向きがちです。しかし、子供の描いている距離まで近づき、一部分に目を向けると、その子の「行為」に近づくことができます。この子が何をしようとしたのか、部分を見ることで見付けられることがあります。

着目するのは  
「全体」より「部分」

葉の上に小さいカエルがいる？  
絵の具の上にペンでかいている？  
くっつけようとしたのかな？・・・

### ② **たどる（かいた・つくった、順番をたどる）**

子供がつくった順番をたどって、プロセスを再現します。絵の具の重なりなど、人差し指でたどりながら順に見ていくと、その時、子供が何を感じ、考えたのか伝わってきます。大人はその視点に寄り添う視点を忘れないことが大切です。

子供に  
「言う」より「聞く」

「どこが一番気に入っている？」  
「ここはどんな場所なの？」  
「何で黄色にしたの？」・・・

### ③ **考える（その子の表し方の理由を考える）**

近付いて、たどって、そこで分かったことをまとめます。この段階で「題名」も参考にします。この時、「事実」と「解釈」を分けることが大切です。青い花がかかっている場合、花を青く塗ったことが「事実」、なぜ青く塗ったのか考えるのが「解釈」です。その子の表し方の理由を考えてみると、作品から子供の声が聞こえてくるような気持ちになります。なぜ、その表し方をしたのか、見た人の視点で考えてみてください。

大切なことは  
「褒める」より「認める」

「たくさんの材料を使ったんだね」  
「海にしたいからこの色なんだね」  
「こんなイメージを感じたよ」・・・

「褒める」というのは、大人の評価をおしつけてしまう可能性があります。まず作品ができたことを認める。そして作品の細部を見て「ここは何？」「この部分どうやってつくったの？」と具体的に部分を聞いてみてください。子供の作品を介してコミュニケーションをとることで、表面上に見えていたものが全てではないということが絶対に分かります。かけがえのない作品で、かけがえのない子供なのだ、ということが分かります。子供の作品の中、表し方には意味があります。考えや思いがあります。作品は、子供「そのもの」です。どうぞ、大切に扱って声をかけていただければと思います。

#### 参考文献・引用

- 「子どもの絵の見方～子どもの世界を鑑賞するまなざし～」 ・ Web「サボなび・子どもの感性に寄り添う」  
「マナビズム「知識」は変化し、「学力」は進化する」 奥村高明 著（元文部科学省教科調査官）  
「自分だけの答え」が見つかる13歳からのアート思考 末永幸歩 著

